



## 2012年「情報メディア元年」 —情報メディア学部開設を記念して—

情報メディア学部長 兼 情報メディア学科長 長谷川 聡

近頃「〇〇元年」という言葉をよく聞く。「3D元年」は2010年立体映画の大ヒットを皮切りにテレビやゲーム機にも広がった立体映像ブームを予感させた年を指し、「電子書籍元年」は2010年米国での iPad 発売とともに言われ始め日本では Kindle や kobo などの端末発売とストア開設がされた2012年こそ元年とも言われる。こうした「元年」は、いずれも「はじめての年」を意味していない。立体映像は1830年代に発明され1900年のパリ万博でも一般公開されており、2010年は歴史上3度目の3Dブームであるとの指摘もある。電子書籍にしても、1980年代以降、企業や家庭へのワープロやWebの普及によってディスプレイ上での文字の読み書きは日常化しており、文学に限っても2000年頃にはケータイ小説がヒットする現象が起きはじめていた。初ではないが「本格的普及」や「社会的影響の拡大」につながる「転機」を期待させる年を「元年」と呼ぶようである。

名古屋文理大学は、2012年4月「情報メディア学部」を開設した。1986年、当時の短期大学稲沢キャンパスに「情報処理科」を開設以来の情報分野の教育研究と、1999年「情報文化学部」として4年制大学を開学し2005年に同学部の学科を「情報メディア学科」とした伝統の上での開設である。2011年にiPadを日本の大学で初めて入学生全員に配布して活用を始めた情報メディア学科を母体に「メディアクリエーション」「情報システムデザイン」「PR・コミュニケーション」の3コースを有する新たな「情報メディア学部情報メディア学科」としてのスタートである。

今、なぜ、改めて「情報メディア」なのか。これまで、コンピュータが事務機として普及して情報処理技術者が求められ、EUC (End User Computing) の時代を向かえて情報ゼネラリストが、そしてマルチメディアやネットワーク環境に対応した新しいスペシャリストが求められてきた。変化が急速な情報分野で本学は常に社会ニーズをとらえた人材育成を行ってきた。現在、日本は、

長引く不況に加え2011年東日本大震災以来多くの困難を抱えているが、政府でICT基本戦略が練られ、小中学校のフューチャースクール推進・学びのイノベーション事業が終盤を迎え2012年デジタル教科書学会が発足し「デジタル教科書元年」とも言われる教育環境の転換期にある。本格的なユビキタス、ソーシャルメディア、クラウド環境、そしてモバイル、タブレットの台頭する新しい「情報メディア」こそ時代の牽引役と期待される。



学園創立60周年を迎える2016年には情報分野の教育研究も学園の歴史の半分を占める30年を数え、情報メディア学部は名実ともに「食と栄養と情報」の学園の一翼を担うはずである。未来を見据え、他をリードする情報教育と、先進のメディアに関する地域に根ざした実践研究を通して、次代を拓く情報メディア学部の発足が、時代の「転機」となり、後に2012年を「情報メディア元年」と言わしめる。こうした気概をもって情報メディア学部開設「元年」の紀要記念号<sup>\*)</sup>の巻頭言としたい。 <sup>\*)</sup> 2013年3月発行